

日本語の存在動詞イルの成立と シテイル形式の文法化*

畠山 真一

The establishing of Japanese existential verb *iru* and
Grammaticalization of *teiru* forms

ShinIchi Hatakeyama

要旨

本論文は、現代日本語の存在動詞イルの成立史とシテイル形式の文法化が緊密に関連していることを明らかにする。現代日本語のイルは、典型的な状態動詞の一つであるが、イルの語源を形成するキルは、状態動詞ではなくむしろ起立状態から着座状態への態勢変化を意味する主体変化動詞であったと考えられており、イルは、主体変化動詞キルではなく、むしろキルの主体変化結果状態を表現するキタリから発達してきたと推定されている（金水、2006）。本論文で検討した歴史的なデータは、キタリから存在動詞イルへと至る意味変化とテイルの文法化が相互に関連していることを示している。すなわち、近世におけるアスペクト形式としてのシテイル形の確立には、存在動詞イルの成立が反映されていると考えられる。このような議論にもとづき、本論文は、シテイル形が、イルの意味的漂白化（semantic bleaching）に加え、テ形節とイルを述語とする主節からなる複文構造（biclausal structure）が単文化することによって確立すると主張する。

キーワード：アスペクト、文法化、意味的漂白

Abstract

Based on historical Japanese-language data, this paper argues that the development of *teiru*-forms, the durative aspect forms employed in Modern Japanese, is closely linked to the development of the modern existential verb *iru*. As noted by Kinsui (1983, 2006), although the modern existential verb *iru* is a stative verb, the existential verb *wiru* used in Old Japanese, from which *iru* partly originated, is considered to be a change-of-state

* 本稿は *MLF (Morphology and Lexicon Forum) 2015* における発表をもとにしている。発表およびその後に多くのご質問・ご指摘をいただいた。記して感謝したい。もちろん、本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任である。なお、本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業より助成を受けている（基盤研究 (C) 「熊本方言アスペクトの再検討」課題番号 26370469）。

verb describing the change from a standing to a sitting position. Since *wiru* is a change-of-state verb, *iru* is considered to have developed not directly from *wiru* but from its stative counterpart *witari* (Kinsui, 2006). The historical Japanese-language data discussed in this paper suggest that the development from *witari* to the existential verb *iru* deeply affected the grammaticalization of the *teiru* forms; the establishment of the *teiru* forms, which acquired a durative aspectual meaning in the modern period of Japanese history, is considered to reflect the emergence of the existential verb *iru*. Based on the examination of the interdependency of the *iru* and *teiru* forms, this study concludes that *teiru*-forms are derived from the semantic bleaching of *iru* and the fusion of a biclausal structure, composed of a *te*-form clause and a main clause whose predicate is *iru*, into a monoclausal structure.

Keywords : aspect, grammaticalization, semantic bleaching

1 はじめに

本研究は、日本語の存在動詞イルが上代のキルからキタリ・イタへとシフトする中で、実質的な意味を失っていった結果、動詞のテ形を中核とする従属節とイルの語源であるキタリを述部とする主節により構成される複文が単文化し、現代日本語のアスペクト形式シテイルが確立されたという分析を提示する。

本論文の構成は次のとおりである。次節においてシテイル形の用法を確認し、その中に「維持」用法が含まれることを見る。続く、3節では、現代日本語の存在動詞イルに、「維持」の側面があることを確認する。続く4節では、現代日本語イルの祖先にあたる上代語のキルおよびキルのタリ形であるキタリの歴史的な変化を概観し、あわせて、現代語シテイルの直接の祖先にあたると思われるシテキタリという形式の歴史的変化も見ていく。5節では、イルの存在動詞化とシテイル形式の文法化の関連性を議論し、6節で、まとめをおこなう。

2 シテイル形の諸用法

日本語のアスペクトにおいて、シテイル形が極めて重要な役割を果たしていることは定説となっている。シテイル形が持つ用法としては、次のようなものがあげられる（工藤1995）。

- (1) a. 動作の進行：弟がアイスクリームを食べている。
- b. 変化結果残存：財布が落ちている。
- c. 状態：釘が曲がっている。

- d. 多回的動作：今回の伝染病で、次々と人が死んでいる。
- e. 習慣：私は、毎日、ヨーグルトを食べている。
- f. 超時：地球は太陽のまわりを回っている。
- g. パーフェクト：うちの子ども、もうおやつ食べてる。

(1) にあげられる用法に加えて、鈴木 (1979, 1983)、高橋 (1985) および森山 (1988) は、「座る」、「立つ」、「寝転がる」といった「自分自身の身体の態勢を変化させること」を表現する動詞（以後、態勢変化動詞）のシテイル形は、変化結果残存に加えて、その「変化結果」の維持動作を表現していると指摘している（以後、この用法を維持用法と呼ぶ）。

まず、態勢変化動詞について説明しよう。森山 (1988) は、これらの動詞に関して、主体動作動詞と同様に「～ツツケル」という局面動詞が後接可能であること、そして主体変化動詞と同様に状態維持のママとの承接が可能であるという点を指摘している。これは、次の例によって確証される。

- (2) a. 太郎は、まだ走りツツケタ（動作動詞「走る」にツツケルを下接）。
- b. *太郎は、まだ結婚しツツケタ（主体変化動詞「結婚する」にツツケルを下接）。
- c. 太郎は、まだ座りツツケタ（「座る」にツツケルを下接）。
- (3) a. {走りナガラ /?? 走ったママ}、バナナを食べる。
- b. 太郎は {# 結婚しナガラ / 結婚したママ}、苗字を変更した（ナガラとママが置き換え不可能）¹⁾
- c. 太郎は、座り心地の良さそうなソファに {座りナガラ / 座ったママ}、コーヒーを飲んだ。

(2) および (3) が示すように、「座る」に代表される態勢変化動詞は主体動作動詞と主体変化動詞の双方と類似した性質を持つという特異性を見せる（森山 1988；畠山 2007）。

このような特質を持つ態勢変化動詞のシテイル形は、その語彙的な意味から「動作の進行」とも「変化結果残存」とも解釈できるという特質を持つ（畠山 2007）。これを確認するため、「～しているところだ」というフレームおよび連体修飾節におけるシテイル形とシタ形の交替を見てみよう。

- (4) a. 太郎は {走っている / *結婚している} ところだ。
- b. {落ちている / 落ちた} 財布を拾った。
- c. 廊下を {走っている / 走った} 生徒に声をかけた。

(4a) が示すように「動作の進行」用法のシテイル形は、「～しているところだ」というフレームに入るが、「変化結果残存」用法は入ることができない（森山 1988；日本語記述文法研究会 2007）。一方、(4b) が示すように、「変化結果残存」用法のシテイルは、記述する状況を変更せず連体修飾節においてシタと交替可能であるが、(4c) が示すように「動作の

¹⁾ この場合、ナガラは逆接で解釈される（和田 1998）。

進行」用法は、それができない（寺村 1984；金水 1994）。

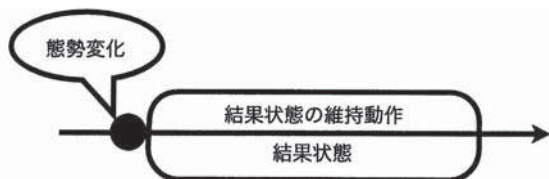
態勢変化動詞のシテイル形は、上述の2つのテストの両方をパスする。次の例文を見てみよう。

- (5) a. 太郎は、ビニールシートの上に座っているところだ。
 b. 隣に {座っている / 座った} 男性が話しかけてきた。

このデータは、態勢変化動詞のシテイル形は、何らかの主体的な態勢変化後の結果状態ともその結果状態の維持動作とも解釈できることを示している。すなわち、先の「座る」の例で言えば、「座っている」は、「座った後、臀部が座面に付いた変化状態にあること」および「その変化状態が維持されていること」の2つを表現していると分析できるのである。この種の用法を本研究では維持用法と呼ぶ。

このような議論から、態勢変化動詞の意味構造は、次のように図示できると考えられる（畠山 2015）。

(6)



(6) に示されるように、態勢変化動詞は、態勢変化を開始限界と見た結果状態維持動作を表現する主体動作動詞とも主体変化結果状態とも解釈できる局面構造を持っていると分析でき、そのシテイル形は、態勢変化後の局面を描写していると考えられる。

3 イルの存在維持用法

前節で述べた態勢変化動詞と同様のふるまいが日本語の存在動詞イルにおいても観察できる。すなわち、次の例が示すように、ツツケルとの承接および「ナガラ / ママの交替」に関して、イルは結果維持動詞と同じふるまいを見せる。

- (7) a. 同じ場所にいっツツケル。
 b. 布団の中に {いナガラ / いたママ} , エアコンのスイッチを入れた。

ただし、イルは主体動作動詞と異なり、局面動詞ハジメルが承接できないというふるまいを見せる。次の例を見てみよう。

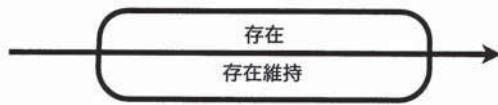
- (8) a. 走りハジメル。
 b. *いハジメル。

(8b) で観察されるふるまいは、動作動詞と異なりイルが開始限界を持たないことを示していると考えられ、態勢維持動詞から開始限界にあたる「変化」を取り外した意味構造を持つ

ことを示していると解釈できる。この開始限界を持たないという性質は、イルを状態動詞たらしめている重要な特質である。

ここまでの議論から、イルは、次のように図示される意味構造を持つと推定される。

(9)



4 𪛗ル, 𪛗タリ, イル

本節では、現代日本語のイルの成立およびシテイル形の確立に至る歴史的な経緯を上代語から近世語にかけて議論する。

4.1 上代語における𪛗ルとヲリ

ここまで、現代日本語における存在動詞イルと、そこから派生したと考えられるシテイル形について考察してきた。本節では、上代語における𪛗ル、𪛗ルの状態化形式と分析できるヲリ、およびテ形+ヲリと分析できるシテオリについて金水（2006）の議論を踏まえてその意味構造を議論したい。

金水（2006）は、次のような万葉集における対比から上代語の𪛗ルは、「座る、じっとする、滞在する」といった広い意味での静止状態への主体変化を表現する態勢変化動詞と推定している。そして、上代語における𪛗ルの状態化形式、すなわち、現代語におけるシテイル形式に対応する動詞（「座っている、じっとしている、留まっている」）としてヲリがあったと考えている。したがって、ヲリは、態勢変化動詞のシテイル形が示す維持用法、すなわち、静止状態およびその維持を意味すると考えられる。

次の例は、万葉集における「立つ」と𪛗ル、および「立つ」の結果状態（「立っている」）を表現する「立てり」とヲリが対比的に使用されている例である²⁾。

(10) a. み崎廻の 荒磯に寄する 五百重波 立ちても居ても 我が思へる君 (568)

b. 立てれども 居れども 共に戯れ (904)

態勢変化を表現する「立つ」と𪛗ルが対比的に使用される (10a) は、𪛗ルが「立つ」と対比的な意味、すなわち「座る、滞在する」といった態勢変化を表現していることを示している。そして、「立てり」とヲリが対比的に使用される (10b) は、ヲリが𪛗ルの結果状態（維持）、すなわち「座っている、滞在している」といった意味を表現していることを示してい

²⁾ 本論文で使用されている歴史的な日本語データは、小学館「新編日本古典文学全集」を JapanKnowledge (<http://japanknowledge.com/>) から検索することによって採取している。

る。

ヲリに関しては、テ形と承接したシテヲリという形式が観察される。次の例を見てみよう。

(11) a. おほかたは誰が見むとかもぬばたまの我が黒髪をなびけて居らむ (2532)

b. おしてるや難波の小江に廬作り隠りて居る葦蟹を大君召すと何せむに我を召すらめや (3886)

これらのシテヲリは、テ形が示す状況とヲリが示す状況（「座っている、滞在している」）がオーバーラップしていることを記述している。言い換えれば、テ形が示す状況がヲリが示す静止状態とオーバーラップしており、「～しながら/したまま静止している」といった意味、すなわち、現代語の態勢変化動詞に観察されるシテイル形の維持用法に対応しているとも解釈できる。しかし、上代におけるシテヲリは、主語に有情物を取るという点で、語彙的な意味を残しており、文法化が進んでおらず、(11)の例は、あくまでテ形節を含む複文として分析されるべきと考えられる。

4.2 中古のキルとキタリ

前節において、上代語のキルとヲリの意味構造を議論し、あわせてシテヲリという形が複文を構成しているという分析を提出した。本節では、中古におけるキル、上代語のヲリに対応するキタリ、およびシテキタリについて議論する。

金水 (1983, 2006) が述べるように、中古においてヲリは衰退し、その代替表現としてキルにタリが接続したキタリが発達した³⁾。

キタリは、ヲリの代替表現として使用されており、キルの変化結果後の結果状態および結果状態維持局面を描写していると解釈できる。次の例を見てみよう。

(12) a. 几帳など、いたくそこはなれたるものから、年経にける^{たちど}立処変わらず、おしやりなど乱れねば、心もなくて、御達^{ごたち}四五人ゐたり (『源氏物語 (末摘花)』)。

b. 御簾のうちより女房^{しとね}さし出でて、三、四人御几帳^{みきりょう}のもとにゐたり (枕草子260段)。

c. 「近くゐたれ。ただ今来む」(落窪物語 卷二)

(12a, b) は、キタリが「座っている」という着座状態を示している例である。(12c) は、「近くに座ったままでいなさい」という着座状態維持に関する命令を示している。本稿の著者による調査によれば、中古のキタリは、そのほとんどが着座状態を意味しており、それ以外の用例は、「居を構えている、そこに暮らしている」、「隠れてじっとしている」という状況を記述していることが明らかになった。具体的に言えば、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』、『うつほ物語』、『落窪物語』、『堤中納言物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『紫式部日記』、『更級日記』、『蜻蛉日記』に出現するキタリ510例中、着座状態と解釈

³⁾ 『竹取物語』や『伊勢物語』ではヲリはある程度まとまった量使用されているが、『源氏物語』においては、そのテキスト量に比して非常に少ない(金水 1983, 2006)。

できなかったものは30例のみであり、約94%が着座状態を意味していた。次の例は、着座状態として解釈することが困難な例である。

(13) 人見るまじくて籠りゐたらむ女子（源氏物語（篝火））。

この例では、キタリで「隠れた状態で暮らしている／滞在している」という状況が記述されていると解釈でき、着座状態とは解釈しにくい。しかし、この種の例は全体からすると少数である。

このようにキタリは上代語のヲリに対応しており、この対応関係に完全にパラレルに、上代語のシテヲリに対応する形式としてシテキタリが中古語に存在する。次の例を見てみよう。

(14) a. また知る人もなきことなれば、人知れずうちながめてゐたり（源氏物語（夕顔））。

b. 「…いかにはかばかしき御答へ聞こえさせたまはむ」とて、うち笑ひてゐたり（源氏物語（若紫））。

c. 爪弾きをし、入りて居たまへり（落窪物語）。

(14a,b) は、テ形節と主節述語キタリが承接したもので、それぞれ「うちながめながら座っている」、「笑いながら座っている」という2つの状況（テ形節によって記述される状況とキタリによって記述される状況）がオーバーラップした複合状況を表現している。(14c) は、「部屋に入った後、その部屋に座っている・滞在したままである」という複合状況を表現している。

筆者の調査によれば、(14)に例示されるシテキタリは、「～した状態のママ／動作をしながラ着座している」と解釈される例がほとんどであった。具体的には、先の資料（『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』、『うつほ物語』、『落窪物語』、『堤中納言物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『紫式部日記』、『更級日記』、『蜻蛉日記』）から採取できた136例中、132例がこの解釈が可能であった。

例外としては、(14c)に加えて、次のような「来」のような移動動詞のテ形がキタリに接続しているものがあげられる。

(15) 京になん、あやしき所に、このごろ来てゐたまへり（源氏物語（蜻蛉））

この場合も、(14c)と同様に、移動イベントが完了した後、その移動した先に滞在するという状況が記述されていると解釈される。

シテキタリの前項動詞（シテキタリのテ形節を構成する動詞）としては、次のような動詞が観察された。

(16) うちながむ、泣く、思ふ、うち笑ふ、うなずく、かき撫でる、抱く、かた膝つく、ねぶる、来、入る

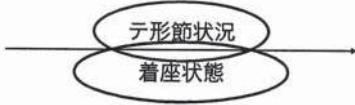
「来」、「入る」を除けば、(16)にリストされている動詞が表現する状況は、思考や感情、接触や表情動作、態勢変化動詞といった静止状態で実行できる動作であった。これらは、「主体が対象を変化させる」、「主体の体全体の動きが伴う」といった動作らしい動作を表現する

のではなく、ある意味で静的な動作を表現していると言える。この意味で、シテキタリの前項動詞は動作性が低いと言える⁴⁾。

ここまで述べてきたシテキタリは、上代語のシテヲリと同様に「テ形節+キタリ」として分析されるべきである。これは、シテキタリに出現するキルのほとんどが着座状態と解釈されること、および、シテキタリの主語が有情物に限定されていることから証拠づけられると思われる。

したがって、シテキタリはアスペクト形式と分析することはできず、むしろ(17)に図示されるように、基本的に、テ形節が記述する状況と着座状態に代表される広い意味での静止状態(維持)がオーバーラップしていることを表現する複文として分析するべきと考えられる。

(17)



これ以降、シテキタリが、(17)に図示されるテ形節が記述する状況と着座的静止状態がオーバーラップされるという複合状況を表現しなければならないという制約を「静止状態維持制約」と呼ぶことにする。

4.3 中世のキルとキタリ

本節では、中世におけるシテキタリの用法を観察し、現代語のシテイル形式への萌芽が見られることを述べる。

4.3.1 『今昔物語』および『宇治拾遺物語』におけるキタリ

前節において、中古のシテキタリがテ形節+主節述語キルという複文を構成するという分析を述べた。基本的には中世におけるシテキタリも同様の傾向を見せるが、中世前期においてキタリが着座状態とは解釈しにくい例が増加している。具体的には、『今昔物語』に出現するシテキタリ391例中、キタリが着座状態と解釈できない例は76例あった(約20%程度)。

さらに、シテキタリの前項動詞が見せる「動作性」が上昇しているという点も観察できた。先に述べたように、中古におけるシテキタリの前項動詞が見せる動作性は低かったが、次の例が示すように中世のシテキタリを構成する前項動詞において、動作性が高い例が観察できた⁵⁾。

⁴⁾ 野村(1994)は、万葉集におけるリ・タリに前接する動詞の動作性が低いことを指摘しており、ここでの議論と平行的である。

⁵⁾ 福島(2000)は、「動作性」に関する判断基準として、「ゆっくり」との共起関係を提案している。すなわち、「ゆっくり」によって修飾できる動詞は「動作性が高い」と述べている。この基準においても、(18)の各例は動作性が高いと言える。

- (18) a. 僧此ヲ食ヒテ居タリ (今昔物語集 卷19-33)
 b. 物縫シテ居タリ (今昔物語集 卷24-39)
 c. 作文シテ居タリケルニ... (今昔物語集 卷28-29)
 d. 小唾吐きてゐたりけり (宇治拾遺物語 卷15-5)

これらの例の前項動詞は、中古の例と同じく着座状態とオーバーラップ可能な動作を表現しているが、対象物が消費される・対象物が出現する・対象物が移動するといった対象物に対する何らかの「もようがえ」を前項動詞が表現しており (奥田 1983)、中古において出現する前項動詞よりも動作性が高い。

さらに、次のような例では、キタリが着座状態を表現するとはみなすことができず、静止状態維持制約の違反が観察される。

- (19) a. その人を待つとて、うち掃きなどしてゐたり (宇治拾遺物語 卷9-3)
 b. (講師が) おりて入るに、この法師出でむかひて、出居を掃きてゐたり
 (宇治拾遺物語 卷9-4)

これらの例では、「掃く」という体全体の動きを伴った動作を表現する動詞が前項を構成しており、キタリが着座状態を表現するとは考えることはできず、むしろ、実質的な語彙の意味を失った単なる存在動詞と解釈すべきであり、シテキタリ全体でシテイル形の萌芽的なものと分析するべきと思われる。

4.3.2 キタリからイルへ

前節では、中世前期においてキタリが「着座状態」という語彙的な意味を失い始めていたことを見た。本節では、この語彙的な意味が剥奪されることによって、存在動詞イルが出現することを述べる。

金水 (1997, 2006) は、室町時代の抄物にキタリではなく「イル」それ自体で存在動詞として機能している例が出現してくると指摘している。次の例を見よ⁶⁾。

- (20) 精鍊ナル行者ノ居ル処ナレバ精舎ト名ヅクルトモ云ヒ... (中華若木詩抄)⁷⁾

この例では、キタリではなくイルが使用されており、さらに「着座状態」といった具体的な変化の意味が剥奪された純然たる「存在」が表現されていると考えられる⁸⁾。

この種の存在状態を表現するイルは、キタリから「イタ」を経て出現すると金水 (1997, 2006) は主張している⁹⁾。抄物に観察されるイタのイタは、過去を意味しているのではなく、タリの「状態化」の機能を受け継いだものと考えられ、発話時 (現在) における存在状態を

⁶⁾ 金水 (1997: p. 248) に (9) としてあがっている。

⁷⁾ 『中華若木詩抄』の用例に関しては、岩波新古典文学大系『中華若木詩抄』を使用している。

⁸⁾ (20) は、金水 (2006) の言う「限量的存在文」と考えられる。

⁹⁾ ただし、金水 (1997, 2006) も指摘しているように、イルとイタは同時期に (同じテキストに) 使用されており、いわゆる「重層化 (layering)」の状況を見せている (Hopper & Traugott 2003)。

表現していると解釈できる。次の例は、イタによって発話時の存在を表現している例である。

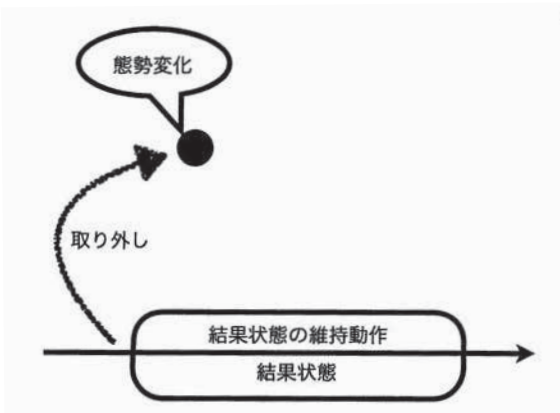
(21) 只今九淵ハ若耶ニ居ラレタガ、若耶ノ辺ハ田舎ナレバ... (中華若木詩抄, p. 121)

この「キタリ➡イタ➡イル」という発達の経路を支持する証拠として、金水(1997, 2006)は、山形県鶴岡方言における発話時の存在状態を表現するイダをあげている。鶴岡方言においては、「太郎は、今家にイダ」という文で、「発話時における太郎の家での存在」を表現可能であり、この種のイダを中世より保持された形式と見なすことによって、「キタリ➡イタ➡イル」という経路が方言学的にも支持されると主張している。

本論文も、金水(1997, 2006)にしたがって、「キタリ➡イタ➡イル」という変化の経路を想定する。

ここまで述べてきたキタリからイルへの変化の中で発生した語彙的な意味変化は、キルが持っていた「具体的な語彙の意味を持つ態勢変化の局面」の剥奪によってもたらされたものと見なすことができる。図示すると次のようになる。

(22)



上代から使用されていたキルは、「座る、滞在する」といった具体的な変化局面を語彙的な意味として含んでいたが、その局面が、室町時代にいたって剥奪され、「具体的(動作的)な意味」を持たない動詞イルへと変化したと考えることができる。さらに、この剥奪は開始限界の剥奪を意味するため、2節で述べた現代語イルがシハジメルといった開始限界を表現する局面動詞と結びつかないというふるまいを発生させ、事態の開始に関して未指定の状態動詞化を進行させたと見なすことができる。これは、まさに2節で述べたイルにおける重要な特質である「開始限界の不在」がこの時期に発生していることを示している。

ここまで述べてきた「具体的な語彙の意味を持つ態勢変化の局面」の剥奪は、『今昔物語』や『宇治拾遺物語』におけるシテキタリの用法にも反映されていると思われる。先に述べたように、中古作品に比べ、『今昔物語』や『宇治拾遺物語』では、着座状態と解釈されないキタリにテ形節が付いた用例が増加しており、この時代に、キタリの「態勢変化(着座状態への変化)」という意味コンポーネントの後景化が始まっていたとも解釈できる。

4.4 近世におけるシテイル形の確立

福嶋(2000)が指摘しているように、中世末日本語において動詞+テイルという形は出現するものの、その主語は有情物に限られており、依然としてテ形節+イルという複文を構成していると分析すべき形態であった。

しかし、近世半ばを過ぎると、無生物主語をとったシテイルや明らかに動的動作を表現する例が出現するようになってくる。

(23) a. 惣体、けだものの中で、爪の割れたものは道が早い。犀などといふやつ、爪が割れて居るによつて(『鹿の子餅』1772年)¹⁰⁾

b. かうしさをうろついている内(『東海道中膝栗毛』, 1802年)

(23a)が、非情物を主語に取ったシテイルの例であり、(23b)が、シテイルが明らかに動的な動作を記述している例である。これらの例は、近世において、イルの元の語彙的な意味がさらに薄れ、シテイルがアスペクト形式として完成していったことを示している。

5 イルとシテイル形の成立

本節では、これまでの歴史的な変化に関する記述をもとに、どのようなプロセスでシテイル形の文法化が進行したかという点を、イルの成立とあわせて議論する。

4節で述べたイルとシテイルの成立史をまとめると次のようになる。

- (24) a. 上代では、態勢変化動詞としてのキルとその変化結果状況を記述するヲリが観察される。また、シテヲリも観察される。
 b. 中古に入ると、ヲリの代りにキタリが使用され、シテキタリが出現した。
 c. 中世に入ると、シテキタリの前項動詞に動作性の高いものが出現しはじめる。
 d. 室町時代に、キタリの「着座」という態勢変化局面が剥奪されることによって、イルという形式が出現。
 e. その後、近世においてアスペクト形式としてのシテイル形が確立される。

ここで、シテイル形の成立史の中で重要と考えられるのは、キルのもつ「着座状態への変化局面」に関するある種の意味的漂白(semantic bleaching)である。キルのこの局面が剥奪されることによって、キタリは、着座状態に代表される静止状態ではなく、より抽象的な「存在維持」となる。この結果、中古においてシテキタリ形式に見られた静止状態維持制約が緩和されることになる。すなわち、中世のシテキタリ(依然としてテ形節+キタリを述語とする主節によって構成される)を構成するキタリは単なる存在(維持)動詞へとその意味をシフトし、その結果、静止状態と不整合な動作を表現する動詞と結びつくことが可能となる。これは、次の例によって確かめられる。

¹⁰⁾ この例は、金水(2006:p.282)から採ったものである。

(25) (講師が) おりて入るに、この法師出でむかひて、出居を掃きてみたり

(宇治拾遺物語 卷9-4)

先に述べたように、この例では、移動を伴う動作「掃く」とキタリが結びついており、中世の前期に静止状態維持制約が緩和されてきていることが示されている。

そして、キタリがイタを経て現代日本語の存在(維持)動詞イルへと変化することによって、「テ形節+主節」という構成であったシテイル形式の単文化(単節化)が開始されると思われる。

キタリがその語彙的な意味をほぼ失って純粋な存在(維持)動詞へとシフトする中で、単独で使用されるキタリ(修飾語(句)を伴わない)はその表現価値を失っていく。これは、名詞句(特に固有名)の持つ存在前提による。つまり、多くの場合、名詞句はそれ自体で「名詞が指す対象が存在する」という前提を持つため、「存在動詞」はその表現価値を「ある場所に位置している」もしくは「ある状況を伴って存在している」に求めざるを得ない。この結果、語用論的に付帯状況が重要となり、シテキタリで「動作が遂行もしくは状態が維持されつつ、存在が維持されている」が表現されるようになると考えられる。

さらに、シテキタリが「動作が遂行もしくは状態が維持されつつ、存在が維持されている」という意味で使用されるにつれ、この形式の中で、「存在維持」が持つ「意志性」がさらに漂白され、現代的なシテイル形式が出現する。すなわち、この意味的漂白の進行によって、意志的な動作を表現できない非情物主語が可能となる。

そして、シテイル形式において、さらに意味の漂白が進み、イルが「存在」の意味をほぼ失うことでシテイル形式を構成するイルが、主節の述語を構成することが困難となり、その結果「テ形節+主節」という複文が、単文化することになる。この単文化によって、シテイル形式が確立すると思われる。すなわち、イルが動詞ではなく、純粋に「動作・状態の維持されること」という文法的機能を担うように変質することによって、純粋なアスペクト形式であるシテイル形が出現すると見なすことができる。

6 おわりに

本論文は、現代日本語イルの歴史的な成立とイルを内部に含むシテイル形式の成立を相互に関連づけ、中古語のキタリがその語彙的な意味を失うことによって、テ形節と主節によって構成されていたシテキタリが、単文化し、その結果現代日本語のアスペクト形式であるシテイル形が出現したと主張した。

しかし、次のような課題が依然として残っていると思われる。

(26) 上代において動作の進行・状態の維持を表現しているように解釈できるリ・タリは、存在動詞アリから派生したと考えられるが、このリ・タリとシテイル形式はどのような関係にあるか。

(27) 上代においては、シテヲリに加えシヲリ（連用形+ヲリ）が観察されるが、なぜシヲリが消滅したのか¹¹⁾。

(28) 近世におけるシテイル形式の確立過程はどのようなものだったか。
これらの課題に関しては、稿をあらためて論じたい。

参考文献

- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (2003). *Degrammaticalization* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- 奥田靖雄 (1983). 「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論』, pp. 151-279.
- 金水敏 (1983). 「上代・中古のキルとヲリー状態化形式の推移」『国語学』, 134, 1-16.
- 金水敏 (1994). 「連体修飾の「～タ」について」田窪行則 (編), 『日本語の名詞修飾表現』, pp. 29-65. くろしお出版.
- 金水敏 (1997). 「現在の存在を表す「いた」について：国語史資料と方言から」川端善明・仁田義雄 (編), 『日本語文法 体系と方法』, pp. 245-262. ひつじ書房.
- 金水敏 (2006). 『日本語存在表現の歴史』. ひつじ出版.
- 工藤真由美 (1995). 『アスペクト・テンス体系とテキスト』. ひつじ書房.
- 鈴木重幸 (1979). 「現代日本語の動詞のテンスー終止的な述語につかわれた完成相叙述法断定のばあいー」『言語の研究』, pp. 5-59. むぎ書房.
- 鈴木重幸 (1983). 「形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトについて」『金田一春彦博士古稀記念論文集 国語学編』, 1 卷, pp. 435-460. 三省堂.
- 高橋太郎 (1985). 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』. 秀英出版.
- 寺村秀夫 (1984). 『日本語のシンタスクと意味Ⅱ』. くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007). 『現代日本語文法』, 3 卷. くろしお出版.
- 野村剛史 (1994). 「上代語のり・タリについて」『国語国文』, 63 (1), 28-51.
- 畠山真一 (2007). 「高知方言のアスペクト形式と時間性に基づく動詞分類」『日本語科学』, 28, 65-87.
- 畠山真一 (2015). 「静止状態の維持とシテイル形式の文法化」MLF2015における発表.
- 畠山真一 (2016). 「シヨル形式の文法化について」*KLS*, 36, 109-120.
- 福嶋健伸 (2000). 「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて：動作継続を表している場合を中心に」『筑波日本語研究』, 5, 121-134.
- 森山卓郎 (1988). 『日本語動詞述語文の研究』. 明治書院.

¹¹⁾ シヲリに関しては、畠山 (2016) を参照されたい。

和田礼子 (1998). 「逆接か同時進行かを決定するナガラ節のAspectについて」『日本語教育』, 97, 94-105.